くれてゆくやわらかい柿の葉
星凍てゐるさびし瞬いてゐる
ポプラの葉が少くなつて子供たちがボールする靴
窓は日當りの悪い警察署の八ッ手の花
かつこう來て鳴く日の子供と作業
山で松笠ひろひあかい實一つ拾ひ
夕燒の雲の中の白い月堀端を歩くに
櫻ちりはてて選擧終つてゐる選擧びらで
麥田風たち霞切鳴いて水少し流れ
雪がはれて雪あかりうまやの馬も霞をとつた
梅雨といふのに夕燒ですす青い柿の木
硫黄の臭ひも山には殘る雪の、行く
仕事のそばで昼飯にするそこに咲いてゐる
麥の穂の出揃うてゐるのが學校の庭
宿の二階に燕の巣がある降る雨つづく
まだあッたかいちちもつてきた牛乳屋さんよく降ります
菖蒲むらさき明けやすきを水に朝の雲
膳のすみにあさづき二三本あるゐりばた
山々つづきて茶の畑青む見ゆる
晴れて花が雨をためてゐたよ
ちちはは、ひとつの墓の下にしづかな
すいと燕が、籠屋さんの編む竹が青くてはねて
倒れ木のあと目立つ殘る雪ありて
青葉の雨やみでさや豆の花白く咲く
桃の毛ぶかいうす皮をむく

横瀬碧山子
林　昭一
梁瀬阿羅與
山根志乃竹
前田木瓜
杉浦徑子
東　信太郎
北田大林木
鈴木梅宇人
栗田白夢
伊達宗勝
鳥居光子
中村信夫
大本俊雄
手塚藤郎
下田　麥
小澤草彦
川久保天琅
御崎花月
杉本伊之助
東野詩外狸
野津歌代子
松井柳城
鎌田一相
加賀谷　宏

いふ。かういふものは凡て舊圓フウサといふ譯にも行かないから困る。

×

けふは私の誕生日だと、數日前、ちよつと口をもらしたので、灰斗のうちでは、赤飯をたき、オカシラつきの魚（此の山中では入手するのに苦勞されたらう）を用意して、祝つてくれた、その心遣は、何ともありがたい。灰斗、吾亦紅、石々と四人、水入らずの膝をくづし、苦學めづらしき濁酒を汲み、遠く雄物川の河鹿をきく。

（六月十六日）

×

此邊、平鹿地方は米産地なので、米の買出し部隊が大さうな入り込み方だ。鐵道では一人三升以上の持込みを禁じてゐるが、列車全部の臨檢をして、一人から三升以上の分を取り上げると、一列車毎にさうとうの米が取り上がる。一日に凡そ三十俵分は浮いてくると云ふ。たとへば、鶏に鮎を呑ましてそのノドをしめて吐き出させる、と同じで、買出し人を鶏にしたる秋田縣獨特の米の供出方法である。

×

福島では、樹一、双眉、楷郎の三人と共に飯坂温泉一泊。二年前に來た時は、飯坂

外はよい月夜の霧の驛まで送ります
一と雨降つたあとの竹藪に行くみちの筍
山脈六甲につづく燒跡霜につづく
みんな落葉したので野茨の赤い實で
その四十九日の水仙が白し
ふけてあめとなる多夜葡萄液の紅のこき
水車廻して流れる水の寒の入り
敗戰の空の青さは白百合の白さ眼にしみる
こんな正月のお飾りつけるほどの柿はある
梨の花のくれてゐる水おと
池の雲少女そこにゐてすすきのほとなつてゐる
雨だれ、どこかで藥打つてゐる
窓をジープのヘッドライトが通つていつたさむい雨
春の山がしづくして晴れて椎の木に椎耳
枯芝、試驗が濟んで出て話してゐる
ひるのてふてふと子供がかへつてきた
そんな日夢は美しき多空は青く
土手は燒かれて風呂敷負つた人が行く風の中
運河行く小舟の朝は二つ又一つ大霜
山鳩の羽根拾ひもちふるさと明日は發つ
音がして割れる木を割り春の日
柿は若葉の雨ふるけふがそれから三年
とにかく退院はしてきてうちの豆の芽
兵舍であつた所の古い馬糞などへも霜
生きて還つて團扇の風母にもらつて

飯田三茶
片桐光成
富永谷衣
栗田千可志
山川白朝
折居遙子
入重田保朗
五十嵐みい
森景諫郎
小林秀洋
石川舟洋
中原紫保子
河崎平一郎
吉村しをり
犬飼啓三
山田こころ
倉内岩男
橋本光男
岩田知司
青研逝水
中野弘雄
白石默忍多
藤村龍平
朝霧北岡
前田一塔

大火の後であり、疎開兒童の受入の初まつた時で、旅館もさはがしかつたが、やうやく昔の飯坂が復舊しつつある。水の音、河鹿の聲は書くまでもない、「おゝ、螢がとんでゐる……」と、湯手拭を欄にかけながら云ふ者がある。（六月十七日）

×

氏家にも一寸立寄つた。市龍、飛南車、折茎子、道正、ひさ夫等、在來の顏ぶれの他に三瀧、鬼繪知など新顏も加はつて、ことはいつもにぎやかである。俊二も鎌倉より來た。宿は道正の家。往復に少し遠いが數舍をもつた田の中の家で、夜は蛙の聲もおもしろく、朝は牛の聲がのどかでいゝ。

×

氏家には先頃まで進駐軍がゐたので、ローマ字が諸方に出てゐる。Ujieとある。一體ローマ字は英米讀みにすると違ふ場合が多い。Ujieも、ウジイと讀まれる。ところが、土地の方言では、昔からウジイと發音するさうだから面白いのである。（六月十八日）

×

此の旅は十七日。家のあたりは椎の花、栗の花のさかり——當分「歸家穩坐」をたのしむこととしよう。（六月十九日）

ある女（特選）

三好叢一路

一筆どつぷりと、それで運勢を見て買ふ、一と書く
町の裏の雪が汚れてゐて女と人を避けてあるいて行く
ここが女のふるさとで女と白い手拭持つて温泉にゆく
暫くは雪で雪でたはむれてゐて女を待つてゐる
女が泣いてする話もそれはそれとして夜の雪山
はるのよの木から出たふたりでつきよをゆく
歸ることにして女はうしろからくる月の木の橋をわたり
女やや捨鉢なしかし物言はずきつちり細帶でゐるとき
別れとは、女とよるの高い橋があつて渡つていく
昨じようゆに蟹の白いみを春になる池のみづゆき
しづかに夜を流れていく雲であるふり返つてもの言ふ

うめ、つばき（特選）

山本木天蓼

海がこんな靜かな晩もあるふたりきり
炭籠でこぼこ張つてほしておくしばらく日あたり
椿さいてゐる空が山の中
椿さいて留守はおばあさん獨り
梅さく米は手杵で白くなる
人の情もつれなさも多の港町三味流してゆく
梅は夕月の水車に搗かせておく
梅さくわなの樣子見に少年足すこし悪い
芹つむにかがまり春がもういちめん
この大きな海からの烏賊干してはんかちのやうな二三枚

社中より

ときどき井泉水先生のラヂオ放送があるが同人諸氏に前以て報せることが出來ない場合が多い。僕が地方へ行つて此間のラヂオの話し聞きましたかとたづねる、いや知りませんでしたと答へる同人が殆どで、さうして大いに殘念がる。放送番組に氣をつけてゐてください。

層雲の發行はいよいよ軌道にのつた。東京印刷の森藤さん上野さんが熱意をもつて發行に協力してくれ佐藤さんがそれに氣を合せて盡力してくれる。秋季號に引續きこの初冬號を出し、次號は既に校正中である。

井先生が前號に書いてをられるが、層雲社の罹災によつて社の藏書全部が燒失して淋しく感じてゐたところ、各地有志の方から一册二册と寄贈があり、だんだん書庫も賑はつて來た。青夫氏が手持ちの層雲全部、鳴雨氏からは大正八年以來の層雲其他の寄贈があつた。戰爭中、空襲のサイレンをきゝながら建長寺山中の一院へ、井先生と僕と二人で疎開した層雲關係の貴重な文獻書籍は、或る秋の日山坂道を、こればかりは他人にまかされないと、井先生が荷車の後押し僕が曳いて龍洞の車庫へ運んだ。

原子ばくだんの跡

松尾敦之

ときれし子をそばに、木も家もなく明けてくる（二児ばく死、）
すべなし地に置けば子にむらがる蠅（長男亦死す）
炎天子のいまはの水をさがしにゆく
この世の一夜を母のそばに、月がさしてゐるかほ
外には二つ、壕の内にも月さしてくるなきがら
ほのほ、兄をなかによりそうて火になる
かぜ、子らに火をつけてたばこいつぽんもらうて
まくらもと子を骨にしてあはれちちがはる
なにもかもなくした手に四まいの爆死證明（妻も亦死す）
降伏のみことのり、妻をやく火いまぞ熾りつ（八月十五日）

×

萱には日の照り、萱もうかげつてゐるところ
葉をおとした空が、夏からねてゐる
配給通帳、しんじつふたりとなりました
歩きならせてけふは橋まで、あめんぼう
爆彈のあとに南瓜は花をつけておきに寒くなる
蕎麥の花ポツリと建てて生きのこつてゐる
身を寄せにゆくふたりなら皿も二まい
萩さくははのもの着てつまに似てくる
やつといらなくなつた氷嚢を軒に、秋雲
秋の日握飯もつて我家掘りにきた
母の墓へ、梅の花ちらさじと汽車が立詰
つまよまたきたよおまへのすきなこでまりだよ

樂しいとこだつた。

其後、兵庫縣の三田に泉丈氏が幹事で新しく句會が出來た。十一月の會には井先生も出席された。赤壽葉氏の復活があり、廣勝氏が應援して活氣がある。鳥取縣の黒坂へ終戰後叢一路氏が歸つてから俄に句會が盛になつた。豐橋にも支部が出來て「みどりご會」といふ。秋夫氏が幹事、雜誌を出す。八王子で後藤安喜貞氏が、靜岡縣で池沼悠夫氏が支部設立中の準備中である。いづれも會員三十名程になるらしい。

本會としては各地の支部と更に密接な連絡をつゞけてゆきたい。幹事諸氏は支部の詳細（支部員名簿…層雲會員以外の人も…例會日其他）を層雲社へお報せありたい。それから層雲會員で、會員カードをまだ出されない方は早急にお送り願ひたい。これは層雲手帳を作る參考にするのだし、種々連絡の爲に必要なのである。用紙は社にあります。

「層雲十八句集」は信州の松本で作つてゐて此程漸く校了になつた。第二十句集は京都で組版中である。荻氏の斡旋で十二月中句出來の見込である。十七句集は品切になつたが第十九集は本社にある。月々の層雲の其根幹である所の不易の作をしつかり味ふてこそ句作の實力が出來る。層雲年刊句集は、層雲讀本であり又層雲句作案内でもある。（俊二）

消息二題

井泉水

喫茶去

京都あたりの古い大きな寺の庭園の、奥ふかい處の丘の上にはかならず茶室がある。そこには扁額がかゝつて、好い文句が好い文字で書いてある。妙法寺の『積々園』の茶室には『喫茶、賣山僧木庵』と書いてある。茶室に『喫茶』と書くのは平凡のやうにも思はれるが、これは『茶を喫する場所』といふ意味ではなくて『お茶一つめしあがれ』といふ氣持である。で、『喫茶去』と三字を書くのが普通であり、さう書いてある方が多い。

『喫茶去』といふ言葉は、禪の道では何かにつけて用ひられる。禪の公案に何評を加へた其の言葉などにも『喫茶去』とあるのが少くない。半方で僧正面からぶつかつて來る時に『まア、お茶でもあがれ』と云ふのは、ゴマカシのやうでもあるが、此のお茶を一ぱい喫む間に、ふつと反省されたり、『あゝさうか』と氣がつくことはよくあることである。だから、茶室にかゝげてある『喫茶去』といふ言葉は、『ゆつくりと氣を落着けなさい』といふ氣持に解すべきものである。

お茶といふものは、たしかに氣を落着けるものだ。『茶の會』といふのは、せまい部屋に靜に坐つてゐることだけでも、落着いた氣にならうが、やはり一服のお茶の作用であらう。近頃は、お茶そのものが不自由にはなつたが、私には煙草よりもお茶の方が愛好物なのだ。殊に原稿をかく時には、此の芳香が心を引立てる上に、是非とも必要なので、これだけは苦心して手に入れてゐる。今はちやうど、新茶の季節でもある。一年中でいちばん、お茶のうまい時だ。客が來れば又、これをすゝめて新茶の香りを味つてもらふ。これも亦樂しいのである。

私の宅にはお客が多い。ゆつくり構へられて時間をとられるのも困るが、電話の談みたやうに、季節の談もせず、用件だけで矢々と歸られると何となく、其の用件も云ひ殘されたことがあつたのではないか、といふ氣がする。勝手元でお茶の沸く間、その位は腰をおちつけてゐて、しづかに一杯の茶を喫つて、そこで餘り長居せずに歸つてもらひたい。私の唯然間にも『喫茶去』と大書しておきたいと思ふ。誰か名僧が此の三字を書いた額でも手に入らないものかしらと、思つてゐる。

木の葉と「光」

一日に一回、どつさりと配達される郵便の中に、けさ、私はK. Katai…Chicago…U. S. A といふ差出人の手紙を手にしてびつくりした。おゝ、Kさんが滯米であつたかといふことゝ、米國からどうして郵便がよこせたらうかといふことの喜ばしい驚きだつた。又どうして疎開先の私の住所が解つたらうかと、ふしぎにも思はれて表書きを見ると、「小石川茗荷町……光文社氣付」とある。どうして又、光文社に宛てたのだらうかといふ不審もいだきながら、兎に角、開封してみると——

彼は開戰と共に收容所に入れられて、「キャンプ生活は向ふ任せでノンキではあるが、生活の感情のない人間の集合といふものは感

心したものでない」といふ氣持で、あちらこちらと收容所を轉々としてゐるうちに、終戰になつて解放され、今はまつたく裸一貫といつていゝ無一物の身として、又、生活の緑にやつとたどりついたといふのである。それから「ユタ州から發行されてゐるユタ日報に、雜誌光の『昇る日を待つ』が轉載されてゐましたので先生の健在を知り、光といふ雜誌のあるのを知りました」と書いてある。これで光の發行所光文社氣付といふ譯も解つたのである。

太平洋戰爭が始つて、しばらくしての時、Kから最後の交換船に載せた手紙をもらつたことがある。其時の手紙は途中、船中の檢閲にかゝつて、大部分が鋏み除かれて、僅かに數行のヨセミテ回想の文句と、山の木の大きな葉が一枚はいつてゐただけだつた。恐らく彼はかつて私と一緒にサクラメントからドライヴして、ヨセミテの谷に遊んだ時の思ひ出にふけり、山の木の紅葉を取つて封じこめてきた氣持らしかつた。手紙は沒收されても、木の葉だけはOKとあつて、無事にとゞいたといふことは、何と淋しいことかと、其の時涙ぐましくも感じたのだつた。といふのは——

昔、英一蝶が罪を得て八丈島に流された。その時、彼は友人の晉其角に向つて、もう便りすることは出來まいが、流人には勞役としてむろあぢのひものを作らすといふことだから、其のあぢの口に自分は木の葉をはさんでおかう、若し魚屋が持つてきたひものに木の葉をくはえてゐるものがあつたらば、一蝶は達者でゐると思つてくれ、と云つた。その後、其角はその事を忘れずに心がけてゐるうちに、果して八丈島から來たといふひものに木の葉を見つけ出して、泣いたといふ談がある。その一蝶の木の葉がKさんのヨセミテの木の葉に思ひ寄せられたからである。

それから四年である。何と長い戰爭であつたことか。しかも戰爭は終つたいま——。あちらにゐるKさんが、まだあちらと日本との個人的の通信が通じないにもかゝはらず、雜誌の「光」があちらに渡り、それが轉載にせよ、彼の目にふれて、私が健在であるといふことの知らせになつたといふことは、彼にはいかにもうれしかつたらうし、其を媒介として、彼の消息を知り得た私も亦、いかにもうれしかつたのだ。「光」といふ其名の通りに、すばやくも太平洋をわたり、暗い戸のすきまからさす光のやうに、彼の心に一脈の光明を投げたといふことは、ほゝゑましい事でもある。彼は今度の手紙の中で書いてゐる。「日本が負けたといふニュウスが出た時には、ほんとうに泣けましたが、『昇る日を待つ』を讀んでから心機一轉明るい氣持になりました」と。私の文章がはるばる海を越えて、かうした一役をなし得たことは、文筆をもつものゝ本願でもある。

木の葉と「光」——何となしに、そんなことが考へられる。かの時、あちらから、音信がはりにこちらへ來た一枚の木の葉のさびしさ。さうして今、こちらから其となく、あちらに屆いて消息を通じてくれた「光」のほがらかさ——いかにも長い長い戰爭は終つたのである。惡い夢を追ふまい。新しい光の世界をおもへば、ほゝゑましいものを感ずる。

あだかも今日、新憲法の草案は發表せられた。わたしたちが多年主張してきた通り、むづかしい漢字は除かれ、國語體を以て平易に書かれてゐる文章で、戰爭はもう永久に日本にはないことが明されてゐる。

庭の木の葉に、復活祭近い光がみなぎつてゐる。けさは、じつにほゝゑましい朝である。

層雲會內規

◎層雲會は井泉水先生を中心として自由律俳句を研究し會員相互の親睦をはかる爲のものです。

◎本會の會員には、毎月雜誌「層雲」を配布し、又隨時「層雲會報」を配布します。又隨時に俳句會、吟行會研究會を開きます。

◎本會は會員五名以上あるところに地方支部を置きます支部は其地方に層雲道の普及をはかられたく、本部としては出來るだけの便宜を（例へば、講演會に講師を出張せしめる如き）をはかります。

◎本會の會員を分ちて、A會員、B會員とします。B會員は月額四圓、A會員は月額**六圓以上**を拂込むものです。

◎層雲への投稿は、B會員は毎月十五句迄、A會員は三十句迄送句出來ます。A會員の投稿は井泉水先生の批點を受け雜誌に登載する前に返稿します。又、A會員は一年一回「層雲手帳」の配布をうけます。

◎本會は新日本文化運動として、「自然、自由、自己一體」を綱領とする層雲道を弘布普及したく、此の運動資金として有志よりの後援を期待してをります。

目次

文章

• 思想……1
• 鐘の音……2
• 旅の茶ばなし……4
• ひとりごと……16
• 旅中消息……18
• 社中より……28
• 消息二題……30

俳句

• 蔦温泉まで…井泉水…3
• ある女…叢一路…28
• うめつばき…木天蓼…28
• 原子爆彈跡…敦之…29
• 麗日壇…井泉水選…4
• 明日壇…井泉水選…18

（表紙　鈴木信太郎）

投稿略規

• 投稿は誰でも自由
• 俳句は一人一月一稿
• 句數は一般は十句迄
• 句稿の添刪を望む方は別項內規に依る
• 用紙は半紙二ツ切大のもの一枚に五句迄、楷書淸記、二枚以上は左上カドを綴る
• 締切は毎月十五日
• 投稿先　層雲社編輯部

層雲　第四〇〇・一號

昭和二十一年十一月二十五日印刷
昭和二十一年十二月　一　日發行

編輯兼發行人　荻原藤吉
印刷人　太田馨
印刷所　東京印刷株式會社
發行所　神奈川縣大船町山之內一五三四　層雲社　振替東京八〇二三番
配給元　東京都神田區淡路町二ノ九　日本出版配給株式會社

定價金三圓（送料十錢）

御照會はすべて返信料添付のこと

有隣亭藏書

荻原井泉水著近刊書

層雲第十八句集	限定會員本	拾八圓	〒六〇
層雲第十九句集	限定會員本	拾八圓	〒六〇
大泉叢書 春蘇る	頒價	四圓	〒三〇
大泉叢書 青葉若葉	頒價	拾圓	〒六〇
大泉叢書 秋晴	頒價	拾七圓	〒六〇
隨筆集 私の綴り方	會員本	拾三圓	〒六〇
句集 金砂子	會員本	拾圓	〒六〇
句集 千里行	會員本	拾五圓	〒六〇
隨筆集 京洛小品	會員本	拾六圓	〒六〇
隨筆集 柿と桃	會員本	拾四圓	〒六〇

讀書くらぶ

神奈川縣大船町山之内、一五三四
振替東京三〇〇一七番、大泉園内

◎井泉水先生の新刊著書を優先的に入手する爲に「層雲讀書くらぶ」があります。
◎讀書くらぶ會員は隨時「くらぶ」宛に購買上の金を拂込んでおき、其の金の範圍にて優先的に發行圖書の送付を受けるのです。
◎拂込は月を限らず、御都合よき時に隨時にて結構、但し一回十圓以上のこと。

層雲　第三十四卷　第四・五號　昭和二十一年十二月一日（毎月一回一日）發行　昭和二十一年十一月二十五日印刷納本

定價五圓